



## 永久機関のジン（２）



別句通 〈bekkutooru〉

(1から続く)

トキヲのシンボル繁華街ともいえるエレクトロシティのはずれにけばけばしいLEDの電飾もまばゆい、円形に設計された凝った外観の巨大な建物がある。

それが決闘(ファイト)カフェ『メサ』である。

その正面玄関の入り口には、『完全なる永久機関の夢を。』と大書された電光ビルボードがあった。

その内部を行けば、あたかも野球場かコロシウムといった態様の、まさしく血で血を洗い、断末魔で断末魔を打ち消すような生臭い戦いの雰囲気漂ってくる。

そこは中央にリングがあり、その周囲をすり鉢状に取り囲むのは、客でほぼ満席になった熱気あふれる観客席である。

「おーい、ジラフ！やれー！やっちまえー」

「おい、コンゴウ！てめえに10万丸(がん)賭けてるんだぜー！」

観客席からは欲にまみれたような怒号が飛び交ってくる。しかしその口汚い罵りとは裏腹に観客席は正装の紳士、淑女も多かった。まるで一種の社交場のような雰囲気もあった。

天井にも近い観客席最上段にしつらえてある電光掲示板には『今対戦のオッズ・装備 [アルカトラス] のジラフ = 1.2倍対装備 [乙亥(キノトイ)] のコンゴウ = 4倍』などと表示されている。

そして格闘技のものよりはだいぶ大きな四角いリングには二人の男がわずかに数メートル離れて対峙している。そのいずれもが面妖で一言では形容しがたいな機械を装着している。また二人とも片腕には腕時計のようなブレスレット付きの緑色のレンズをはめている。

ジラフと呼ばれたほうは中肉中背の筋肉質な体躯で、オートバイのハンドル部分だけを切り取ったような機械を手に、シートに座っている。

そしてシートの背中にはエンジンのような物があり、それとハンドル部分とはエグゾーストパイプを折り曲げたような金属の管で接続されていた。そして足には金属製の複雑な表面のブーツを履いていた。

もう一人のコンゴウと呼ばれたほうは長身の青白い顔をした学者タイプの男であり、年齢は不詳である。

そいつは祭りの御輿(みこし)のようなオリエンタルな外観の高さ2メートルはありそうな機械に下半身をすっぽり埋めて乗り込んでいる。それははまた、関節のある四つの脚を持ち、それでもってリングに立脚している。

更にその機械のボディの数カ所から触手のような管が何本も出ており、うねうねと蠢いていた。

そう、彼らこそが戦う永久機関士であり、彼らが今、乗っている機械は装備(エキップメント)と呼ばれている。

その動力源こそが、未だ不完全ではあるが今日の科学技術の到達点である永久機関によるエンジンなのであった。

“ハンドル”をつかんだジラフが言う。

「クッククッ。今日が貴様の命日になるかもな。不戦敗になったほうが身のためなんじゃね

えか？」

その不敵な「宣戦布告」は場内の3D音響を計算された拡声器で館内目いっぱい響き渡った。

一方、「御輿」に乗り込んだコンゴウが言葉を返す。

「愚か者よ。私の言うべき言葉を言うもんじゃない」同じく館内に地獄の咆哮のごとく叫び渡り否が応でも観客の興奮はクライマックスに達した。

こうして闘気ほとばしらせる永久機関士たちは戦いの前の儀礼を交わした。

緊張感みなぎる決戦直前の修羅場といった会場にアイがたどり着き、観客席の最前部の指定席のシートに腰をかけた。

アイはリングや電光掲示板の対戦者表を一瞥した。そして鞆から一通の手紙を出した。

それは一読してどうということもない内容のかなり長い文面なのであるが、右から左にかけて上から下に斜めに字を追って読むと真の内容を読み取れる特殊な文面である。

[アイ、トキヲ・シティに行って十村仁(とおむらじん)という少年を捜して会いなさい。かつて私の教え子だった者の息子だ。その子とお前は力を合わせて生きて欲しい(以下略)]

(刑務所にいるおじいちゃんの手紙には、この日この場所に来れば会える確率が高いと書いてある。十村仁様!) アイは手紙を抱きしめて妄想がどんどん膨らんでいるような目つきになる。あたかも未だ見えぬ十村仁が、夢見る少女普遍の憧憬の対象である白馬の王子か、セレブの御曹司であるかのように!

突然電子音のゴングが鳴り、アイが我に返った。

それは館内に大轟音を響き渡らせ、観客の熱気は最高潮に達する!

リングにいる戦いの当事者たちは立ち合いの間も惜しみ、相手の駆逐に出奔する。

「行くぜー。これが俺の装備『アルカトラス』だー！」

アルカトラスと呼ばれたバイクもどきを装着した男がそう言うと、アクセルをふかすような操作した。そして背中中のエンジンが大咆哮を発する。場内は騒然とした。

「ふん。私の『乙亥(キノトイ)』の前じゃガラクタかまがい物の三文コピーキャットだよ！」

そのせりふが早い、かジラフが先制を仕掛け、エンジン噴射によって宙に浮かび上がり、アクセルを回してハンドルを握りしめ、全速力で乙亥(キノトイ)と呼ばれた御輿に向かっていった。

ジラフがアルカトラスの背後の部分から5本の機銃が出て来た。それが火を吹いた。

コンゴウはすかさず背を屈めたかと思うと亀のように『乙亥(キノトイ)』の中に体を引っ込めてしまい、その部分は蓋で自動的に閉じてしまう。

「けっ。」

ジラフが舌打ちをするや否や、乙亥(キノトイ)の触手の尖頭からレーザーが発射される。

ジラフは手元のスイッチを押すと、そのレーザーがアルカトラスをよけて通過していく。

「くそっ! ミミズ野郎が!」 アルカトラスは宙でバランスをとるのに必死であった。

「ふ。よけるので精一杯か」

乙亥(キノトイ)の正面から砲口が現れ、紅蓮の炎がアルカトラスに向かっていった。

「ぐええ〜」

アルカトラスとジラフが炎に包まれる。

コンゴウが乙亥(キノトイ)本体から顔を出して不敵に微笑み、親指を下に突き出す仕草をする。黒こげになったジラフはに巻き付いていた触手に閃光が走り、ジラフがアルカトラスとともにリング上に転がり落ちた。

「ぐはッ！」

ジラフは顔を起こし、炎をはらった。体の回りにイオンを発生させて気体の耐火壁を作り炎症の被害を最小限に食い止めていたのだ。そして火が消えるやそのまま敗北のサインである、レンズ光を消滅させてしまう。

「勝者—コンゴウ！」

観客席の大歓声。そしてジラフに賭けていたであろう者の失念のため息。

コンゴウが乙亥(キノトイ)から降りて来て、観客に向けて両手を揚げてガッツポーズと満面の笑みで応えた。

続けてジラフが装備を解いて満身創痍でリングに降りてくる。「うう……」　コンゴウは哀れみの顔も見せずにジラフを見て片腕を向けた。ブレスレットで腕にはめたレンズが赤い輝きを放つ。

「ふふふ。君の”特許”は吸収だ。ルールだからな」

ジラフがはめていたほうのレンズから文字やら数字やら数式やらの固まりが一条の筋となって飛び出し、まるで生き物のようにコンゴウのレンズに流れ込む。

場内のアナウンスがけたたましく勝者をほめしやす。勝てば官軍なり。

「コンゴウ！誰も彼を止められない！これでまた一步『完全なる永久機関の夢』に近づいたかー！？」

再び大歓声。

大歓声とアナウンスの中、コンゴウは得意げに笑みを浮かべて目を閉じて腕組みをしている。観客席でアイがドリンクを飲む。

「はあ～ここに来れば会える可能性が高いと言われたけど。対戦者カードには無いしな～」

アイが場内最上段の電光掲示板を見る。たしかにそこに十村仁の名前は無い。

場内アナウンスが大音量でがなりたてる。

「さあ、飛び入り大歓迎。誰か永久機関士の方、コンゴウの保有する特許を獲得したいと思われる片はいませんか。今得たジラフの特許もあわせるとコンゴウの保有特許の現在価値は……な、なんと4千万丸(がん)！」

アイがあたりを見回す。

「今日は帰る」

アイが席を立つと、ひときわ高い歓声がかが上った。

「おお～命知らずの挑戦者がいたー！」

アイが振り返る。

リングをはさんだはるか向かい側の後方の列の席に手を上げている者がいる。その手にはコンゴウたちと同じレンズをはめていた。

コンゴウがリングから顔を見上げ、その拳手の主を見つめる。そして放送席のブースのほうに顔を向けて無言のままきつい形相で頷く。

アナウンスは調子よくまくしたてる。

「よ～し、そこの手を挙げた君一、コンゴウはOKしたようだー」

手を挙げた者は少年だった。背は160センチ半ばくらい。堅く無造作に伸びた毛髪に、凜とした眼差し、その上に意志の強そうな濃い眉を掲げているが、片方の眉毛は眉尻半分が無くなっている。そして肩にはギターケースを背負っている。

客席の通路を歩き、欄干の手すりに足をかけるとリングから見上げていたコンゴウに対し、片手の中指を突き立てた。

そして手すりから身を投げ出し中空で一回転して床に着地した。しかしタイミングを失って、膝を崩してしまう。

「いててー……でも大丈夫！」

少年は何事も無かったかのように立ち上がる。しかし膝をさすった。

「いってー。やっばいてえや」

観客席からは嬌笑の渦。アイがそれを見て声を出した。

「あっ、あいつは！」

少年はリングから彼女の視線に声に気づいたか、アイのほうを向いた。

「あ！やあ！！さっきの女の子！」

少年は頬を少し染めつつ口元をだらしなくゆるめて大声であいさつの叫びをする。

周りの観客はそれを聴いてくすくす笑い出し、アイのほうに顔を向けてきた。アイは火が出るほど赤面し、背を屈めて身を隠そうとした。

アナウンスが響く。

「おおーっと、無理してカッコつけないで。大丈夫？ーではお名前と年齢をどうぞ」

お供のスパアのように浮遊する、四角い物体がマイクを携えてジンのそばに近づいてきた。

しかしジンはマイクの受け取りを拒否し、大きく息を吸ってから大声で怒鳴った。

「ジン、十村仁、17と3ヶ月！女性のみなさーん！」

会場いっばいに響き渡る肉声で、場内が静まりかえる。ジンが両手を後頭部に回して、おどける。

「惚れるなよ」 会場全体がコケる。

「え！？十村仁？あれが？」

アイが祖父の手紙にあった名前と同じであることを知って驚いた。

アイの隣に座っていたオカマっぽいデブ男が頬を赤らめる。

「まあ。可愛いッ」

アナウンスが叫ぶ。

「おっとー、これは随分調子がいいぞ！さて実力のほどはどうか」

コンゴウは顔つきが徐々に陰しくなっている。

「少年。ここはカラオケ大会じゃないぞ。目立ちたきゃよそへ行きたまえ！」

「なんで？次に勝って目立つのは俺だぜ。オッサン」

ジンはコンゴウに背を向けてズボンをおろして尻を見せる。

「ぬう。君は世間をなめているな！」

場内はまたまた大爆笑。

ジンは着衣を正し、コンゴウに人差し指を向けて叫ぶ。

「十村ジン、永久機関士としてあんたの特許をいただく！」

「！」

コンゴウは不敵なそのセリフに眉をし構えた。

ジンは大声で叫ぶ。

「俺は到達する！『完全なる永久機関の夢』へ！！」

観客席がどよめく。

アイは固唾を飲む。

他の観客たちが話しあう。

「十村ジン？もしかしてあいつは十村誠(とおむらまこと)教授の息子？」

「十村誠って永久機関を今のかたちにまで飛躍させた研究者だろ？」

コンゴウが静かな口調でジンに語りかける。

「貴様は十村教授の息子なのか？」

ジンが目を閉じて腕組みをする。

そのとき、アナウンスが鳴り響く。

「おお〜っと、これは凄い！ジン機関士の保有特許の現在価値は、なんと5千万丸ー！」

観客席が更にどよめく。

コンゴウが目を見開き瞳孔を広げて口元を意地汚くゆるめる。

「この少年が？さすがは十村教授のご落胤だ」

「まーね。でも、親父は親父、俺は俺だけどね」

「くっくっ。しかし貴様の装備はどんなものだね？特許に値打ちがあっても実際に雌雄を決するのは装備の強弱と経験だ」

「そんなことは関係ねえ。わかってんだろ？コンゴウさん。絶対アンタを倒さなきゃいけねえ！」

ジンが決死の形相でコンゴウを睨みつける。コンゴウは不敵に笑み返す。

(3に続く)

## 永久機関のジン（２）

<http://p.booklog.jp/book/76234>

著者：別句通〈bekkutooru〉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bekkutooru/profile>

\*本作品はフィクションです。実際の人物・団体・事象等とは一切関係がありません。

\*本作品の著作権はGK CIRCUIT LIMITEDが保有しております。

\*本作品の２次利用は無償とします。ご利用される方は[mail@gkccircuit.com](mailto:mail@gkccircuit.com)か

若しくは<https://twitter.com/bekkutooru>

にツイート等してご一報下さい

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76234>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76234>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ